

徳川齊昭と伊達宗城(九)

—— 安政元年の往復書翰(続) ——

河 内 八 郎

前号に続いて、安政元(一八五四)年の五月から後半にかけてより、同五(一八五八)年まで、丸四年間の、伊達宗城と徳川齊昭の、一群の往復書翰に入る。安政元年はいうまでもなく、三月三日に日米和親条約が神奈川で調印され、下田と箱館の開港が決った年である。齊昭の攘夷論・海防論は、新たな「現実」に直面する。宗城とても、前号の「一〇七」号の書翰で、それを「国家多端困厄、廟議不振、有志血涙、切齒解体之時」と慨嘆している。

以後、国家的事態は次々と新局面の展開を見る。そして安政五年には、日米通商条約の勅許問題、井伊直弼政権の成立、將軍家定の継嗣をめぐる、いわゆる「一橋派」と南紀派の対立、そして直弼による反対派弾圧の開始、安政大獄と、朝幕の対立、幕府内部の抗争等、幕末期国政最大の危機を迎える。兩人の往復書翰は、回数減ってまばらになり、この安政前半の激動期を経て、安政五年七月五日の齊昭の「急度愼」、十一月二十三日の宗城の致仕、退隠に至る。

齊昭はこの間、藩主慶篤を通じて水戸藩政を積極的に指導し、かねてからの藩内の反対派、結城寅寿らを安政三年四月二十五日に斬罪にして、党派の抗争の処理を強行、軍制・兵制の改革、銃砲鑄造等、軍事面の「近代化」を軸と

する「安政改革」を推進する。

一方宗城も、長州藩出身の村田蔵六（大村益次郎）を登用して、安政二年に軍艦建造にあたらせるなど、やはり積極的な藩政の展開にあたる。西南雄藩の一つとして、この時期の宇和島藩は重要である。

安政五年に決定的段階を迎える將軍繼嗣問題は、嘉永六年の中ごろに表面化する。本号「一一三」五月二十八日の宗城書翰などがそれに関わるが、松平慶永は嘉永六年七月、江戸で島津斉彬と初めて会見、將軍繼嗣に斉昭の子の一橋慶喜を推す考えを述べているが、翌安政元年、伊達宗城がその考えに同調、斉昭・慶篤との接近が、右の書翰の前から進められ、いわゆる「一橋派」が形成されていく。

本号では、この両人の最後の時期の書翰のうち、紙幅の関係で、安政元年分の残りととどめる。話題の中心は、安政元年三月三日の日米、八月二十三日の日英、そして十二月二十一日の日露、各和親條約の調印問題である。斉昭の態度が、強烈な「攘夷論」であることはともかく、宗城の考えが、極めて激しい幕府批判で一貫し、断乎たる外交の展開を主張していることが注目される。

また安政元年十月には、弘化年間から九年間宇和島にかくまわれていた、斉昭派の水戸藩士菊池為三郎が、斉昭に呼ばれて水戸へ帰藩することになった。この件に関する「藍山公記」の記事を参考に、抜いてみた。

また、次の安政二年については、両者の往復書翰は、年代のはっきりしているものとしては一点も無い。「藍山公記」のその年一年分の中にも、書翰のやりとりをした事を記す個所が無い。

一一一、安政元年五月十二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『聿修叢書 九下』所収、但し、宇和島伊達文化保存会写本による。

(1)・(2)・(3)とも「藍山公記 卷五十六」安政元年五月十二日条所収

(1)

謹而拙贗拜呈仕候、陰霖日々濛々然御坐候処、先以閣下倍被為揃、御勝常被為在、恭悦無量奉賀寿候、扱爾后者久々不奉伺御機嫌、重々恐縮之至奉存候、先達ハ御返翰被投、難有奉盟誦候、加之御深意御坐候御重之内被下置、別而奉感荷候、玉器返納之驗迄ニ、弊藩産之鱷子外差上、乍不珍と奉存候得共、玄鶴一翼、是又進献仕度、尤両品共数月に罷成候間、風味坏如何可有御坐哉、何分御側向之賞味にも相成候ハ、本懷奉存候、先者此不整候ニ付、御動靜奉伺度、如此御坐候、恐惶誠懼、頓首謹言

仲夏旬二

伊達遠江守

宇宙頼水府聖明老公閣下

侍史中

再敬白、不正候天下民社之為、呉々御保練被為在度、奉謹念候、頓首

内容 一、贈り物入れの重箱の返納を兼ねて、領国産の鱷子(いな、ぼらの子)等、及び玄鶴を進献

(2) 別紙(1)

極密啓

極密申上候、別楮陳奏仕候通り、尾公御誠意雍塞仕候而ハ、以の外之儀、通徹水解ニ相成度奉渴望候、只以之處にてハ、閣老不平計ニ無御坐、御内輪ニ而、種々御意外之事被為在候、都而害引出可申勢ニ相成候云々、御密示被成下候処、全体之濫奥詳悉不仕候ニ付、今日ハ昼後より角筆為御招、密談可仕、御事情承知仕候ハ、聖慮相伺、取計方御

徳川齊昭と伊達宗城の——河内

指揮も相願候半と奉存候間、此段申上置度、恐惶再拝

五月十二日

①尾公Ⅱ尾張名古屋藩主徳川慶恕。先に四月某日、島津斉彬、松平慶永、伊達宗城らは、徳川慶恕に書状を送り、徳川斉昭と協力して幕政の回復に尽力するようすゝめているが、そのことに関してであろう。彼等はこの頃より連携を深めていく。五月には、慶恕は、阿部老中に、アメリカ艦への処置について意見書を出す。

②角筈Ⅱ美濃高須藩主(尾張徳川家支流)松平摂津守義建。尾張徳川慶恕(もと義恕)実父。角筈(内藤新宿西の青梅街道附近)にはその下屋敷がある。(「藍山公記」)の註記による)

内容 一、尾張公の幕政参画は、時局の転換に益あらんと、渴望す。

一、閑老たちも、この件については不平ばかりではなからう。内輪では「意外」の進展があろう。

一、今日昼後、角筈の高須藩邸に慶恕を招き、密談すべし、その上で事情を十分承知の上、將軍の判断を仰がん。

(3) 別紙(2)

密奉復

又密奏仕候、墨奴於松前之様子^①、是極密探索仕候処、城中へ可参と申懸候処、此義も断、且上陸も猥に不為致旨、結局 都下又浦賀・下田杯より手柄宜敷、是迄之手続にてハ不可解、若哉如中山^②ひらあやまりに致し、手厚ニ贈物杯遣、穩ニ致もらひ、空譽を求候密策かと、密意ハ相考居候処、此頃承候得ハ、近日中松前より飛檄参候、其因ハ段々墨奴及乱妨候由、一戰致、不叶時ハ津輕へ引取候外無御坐と申来候と承候、実事に候ハ、疾く津輕へ逃渡候半、一戰云々、町人肌之松前者、不存寄候処、前聞と表裡之違、両端共実否不相分候間、伺上申候、一躰ハ何れ一度及戰爭不申而ハ不相濟、早き方禍患浅易ニ可有御坐候、禍転而為福之時に候半か、当今之勢にてハ、渠奪拠致候ハ、手を引、南・津兩藩丈之海岸嚴備致置候位之御発 令かと、乍憚憂杞不啻奉存候、右実否奉伺度候

一、日本史一昨年頂戴仕候処、兼而も奉願候通、右之通不足御坐候、何率御出来相成居候ハ、御恵与奉希上度、此時

合倍、日本精神培養仕候義、肝要ニ付、尚更奉渴望候、恐々再拝

五月旬二

又申上候、日本史不足之冊子、可希と奉存候処、少々見合整兼候故、近日中、藤誠之進可奉希云々、再拝

- ① 墨奴松前云々 四月十日、アメリカ軍艦ヴァンダリア号 Vardaria 他二隻、下田を出航して、箱館に向う。ついで四月十七日、ペリーは、ポーハタン号 Powhatan に乗り、ミシシッピ号 Mississippi を従えて、箱館視察に出発。先発三艦は十五日、そしてペリーは二十一日箱館に入港。四月二十六日、ペリーと松前藩家老松前崇効（勘解由）が会談、ペリーは新開港地箱館の遊歩区域設定を要求。五月八日、遊歩区協定の決せざるまゝ、ペリーは箱館を出発、下田に戻る。五月十二日、ポーハタン号で下田に入港。以後、下田で日米交渉が続き、五月二十五日、「日米和親条約附録」を調印（下田条約）。中山 中山王国、琉球。そこでのペリーへの対応。

- ③ 「日本史」 一昨年（嘉永五年）五月二十一日書翰（前号「一〇二」）、斉昭より宗城へも「大日本史」を進呈。

- ④ 藤誠之進 藤田誠之進（東湖）

内容 一、ペリー一行の松前での動静探索の結果、浦賀・下田より穩便なり。琉球のように当方が下手に出た結果か。

一、しかし、続いて飛報来り、「乱妨」に及ぶとのこと。松前は一戦いたし、敗れし時は津軽へ引取る覚悟という。

一、その勢にては、松前より手を引き、南部・津軽の海岸警備にとどめざるを得んかと案ぜられる。

一、献呈を受けし「大日本史」の欠巻分の惠贈を乞う。

一、追伸、「大日本史」の不足分の確認のため、近日中に藤田誠之進を頼みだし、

— なお、五月六日には、水戸家臣获信之介が宇和島藩邸に来り、人払いにて宗城と密話している（「藍山公記 卷五十六」安政元年五月六日条）。 —

一一二、安政元年五月二十一日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

「藍山公記 卷五十六」安政元年五月二十一日条所収

徳川斉昭と伊達宗城の——河内

本月十一日之芳墨^①、薰誦いたし候、薄暑之候、愈御佳勝、欣慰之至ニ候、珍キ鱒子・玄鶴御投恵、不堪感謝候、御別属
 縷々芳論、毎度御精神感服々々、近々弊邸へ御越之儀御問合、承知いたし候、外々と違ひ、縁組をも致候中故、御越
 候ハ、久々にて可致面晤候、六朔 當中於て豚見へ日限等御申合可然候、仍而ハ御申聞之件々、皆面晤を期し、不
 煩筆墨候也、

夏五念一日

水 隠士

遠州殿

御報

① 五月十一日之芳墨前出「一一一」伊達宗城書翰、五月十二日付。

② 縁組ニ齊昭長女賢姫、天保十年五月三日宗城と婚約。しかし、六月七日病死。

内容 一、恵贈されし鱒子・玄鶴への礼状

一、近々宗城の水戸藩邸訪問を歓迎す

一、右の件は六月朔日、江戸城中で息慶篤と打合せられたし。

一一三、安政元年五月二十八日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

「藍山公記 卷五十六」安政元年五月二十八日条所収

(1)

一昨日は、不存寄 尊書被成下、難有奉盥読候、不順之時候御坐候処、閣下倍被為揃、御勝常被為在、恭悦無量奉萬
 寿候、其内近々少々御脚氣ニ被遊御坐候旨相伺、他之御病症とも違候間、何分御保療被為加度、伏而願上候、扱又御

目通之儀相伺候処、外々とも違候故、参 館仕候ハ、御逢可被成下旨、積年之願相違候儀、無此上難有仕合奉存候、
当聖公へ尚朔日拝謁仕候上ニ而、日頃可相同様可仕と奉存候、昨年来、御庭拝見希置候故、其儀何分可相願と奉存
候、将又過日ハ不敬至極之罪言密奏仕候処、以御仁恕御聞啓被成下、殊ニ感銘恐入奉存候、萬事不遠内奉得鳳顔、可
申上と奉存候、再奉報申上度、且御動静相伺申上候、恐惶、頓首謹言

夏至後一日

宗城 百拜

宇宙御頼水府聖老公閣下

① 本書は「一二」五月二十一日付斉昭書翰への返書。

② 六月朔日、当聖公（慶篤）へ拝謁「一二」に、宗城の斉昭訪問の日程につき六月一日に慶篤と打合せの件について、斉昭よりの返事がある。

内容 一、斉昭の脚氣の見舞

一、宗城の斉昭訪問、積年の願が叶い喜ばしい。

(2)

御密啓奉服 (復)

御密翰難有奉拝閱候、先日中より少々御脚氣ニ被為在候処、過る十七日被遊御押御登 城被為在、御長坐ニ相成候故、
又々被遊御腫候得共、御薬用ニ而早速被遊御復候旨、先以恭悦奉存候、右体之御儀候、一昨日も御登 営御断ニ相成
候得共、僕参 館仕候而、表御座敷ニ而御長談ハ御嫌疑も被為在候ニ付、去年以来願候末ニ付、此度も大暑ニ不相成内
云々相願候而、御庭拝見可仕、夕刻より 聖公閣下ニハ、御茶杯ニ而御目通可被仰付と被思召候旨、左候ハ、御
表ニ而ハ、 当聖公御目通可被成下、於御庭 聖公御目通云々可被遊旨、左様にも相成候ハ、別而難有仕合、御
礼可奉申上様も無御坐候、御教示被成下候御都合ハ敬承仕候、何れ明後日於 営中 当聖公へ参承、且御庭拝見之

儀とも切ニ可相願と奉存候、扨又、薩摩・松越其外、御目通相願候者御坐候得共、於公辺、御縁者・御連枝之外ハ云々と御坐候故、御縁も無御坐候而ハ御差支にて、薩摩・松越も御目通被仰付不申旨、当今之時合別而不都合之御儀、残念奉存候、毎度其儀ハ薩摩・松越杯密話、痛歎當惑仕居申候、如尊命、御直ニ御教示奉伺候と又申上候儀も、書面上とハ霄壤之儀ニ而、僕杯ハ、罷出御目通相願候而も、奉蒙聖教候計ニ候得共、薩・越之如者ハ、被召寄御密話被為在候ハ、九牛一毛之御為も可有御坐、第一天下公辺之御為に相成候儀も可申上と奉存候得ハ、別而残念至極奉存候、且憚多き尊諭恐入候得共、僕ハ御縁者にも候得ハ、此度ハ御英断ニ而御目通可被仰付旨、追而何とか阿閣始より可申上かは知れず候得共、此度兩へ御密談被為在、との道御目通可被仰付旨、為微身種々被遊御配慮、被成下候段、深々恐縮之至奉存候、尚又参殿迄に、薩摩守へも打合置、同人よりも相頼候儀も候ハ、御直々可相伺と奉存候、無此上相楽罷在申候、奉服迄如此ニ御坐候、恕惶、頓首百拝

① 十七日押て登城ニ齊昭、五月十七日登營し、將軍に会い、阿部老中と会谈、神奈川条約の改訂を要求。齊昭は、三月十八日、海防参与の辞任を幕府に願出るが、幕府は四月三十日、その願を容れ、連日の登營を免ずる。この五月十七日以降齊昭の登營はない。

② 昨日云々ニ五月二十六日、阿部老中は、幕府財政の状況を齊昭に伝えて意見を聞く。しかし齊昭は登營せず。(『水戸藩史料 卷八』、上巻乾、三九〇頁以下)

③ 薩摩・松越ニ薩摩藩主島津薩摩守齊彬、越前福井藩主松平越前守慶永。

内容 一、齊昭五月十七日登營して悪化せし脚氣の回復を喜ぶ。

一、五月二十六日、齊昭は登營せず。

一、この際宗城が齊昭を訪問して、表立って会谈するは、疑惑を招くべし。

一、それでも、去年来の希望につき、大暑前に訪問したし。庭園拝見を名目とし、慶篤とは、庭での御目通りにすれば有難し。

一、島津齊彬・松平慶永も、齊昭・慶篤の目通りが叶えば、天下公辺の為に相成らん。

一、参殿までハは、斉彬とも打合せ置き、同人より依頼の儀あらば聞き置かん。

——この頃、斉昭が神奈川条約(和親条約)を見せられ、それに憤激して登営拒否をしているのに対し、阿部老中以下幕閣の評議は進んでいない。しかし五月二十五日には日米和親条約附録(下田条約)が下田で調印される。慶永・斉彬が、宗城の仲立ちで斉昭に接近していく時期であった。この連帯を強めた問題は、何れ表面化する、將軍継嗣に、斉昭子の一橋慶喜を推す動きであった。——また、このところ何点かの往復書翰にみえる宗城の斉昭訪問については、六月九日に実現している。「藍山公記 卷五十七」安政元年六月九日条に、次の記事がある。

「巳刻過(午前十時)ヨリ水戸侯邸へ御出、十六年目ニ寛々御対面、庭内御散歩ノ上、老公御休息ニテ御密話、御栗場モ遊サル、御鑾邸アリ、子刻(午後十二時)過御帰邸、翌日御謝礼ノ御書面ヲ進ラル、之ヨリ嚮キ七日、同侯ノ同朋山形運阿弥ヲ招カレ、九日御出之御都合ヲ御内談アリ、八日、必ス御出アルヘシト申来ル。」

「十六年目」というのは、天保十(一八三九)年、斉昭長女賢姫(さかひめ)と宗城との婚約時のことであり、前年から当時二歳の少壮期の宗城が、かねてから斉昭と親しかった養父宗紀に連れられて、しばしば小石川邸に斉昭を訪問し、時局を語ることがあった頃を指している(本誌第十号「四」註②参照)。

翌安政二年六月四日、水戸家において、浅草清光寺で、賢姫十七回忌の法事が執行され、宗城より香奠銀二枚がおくられ、代香人として若年寄森内藏之助が、宗紀より銀一枚、代香人小姓頭沢田源三郎が、宗紀夫人より銀一枚、代香人奥年寄小梁川主膳が、そして宗徳より銀一枚、代香人は宗紀と同じ沢田、が参っている。「藍山公記 卷六十九」安政二年六月四日条)

——なお「藍山公記 卷五十七」安政元年六月二十二日条には、「水戸老侯ヨリ御書翰来ル」とあるが、書翰の引用はない——

一一四、安政元年七月三日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 「藍山公記 卷五十八」安政元年七月三日条所収①

密呈仕候、然者昨日薩摩守方へ罷越候処、近衛殿より早使ニ而御報書御座候趣故、早速薩摩守拝見仕候所、此度禁闕御造営之儀ニ付御心配御座候条被 仰達、同人と密談伝承仕候処、近衛公御建白誠以御尤千萬、御忠誠之程、乍憚感激敬伏候、両人ハ勿論、皇国之人朝望野誰か是を希奉らざるもの有御座へきや、此度の如き御急難ニ而奉存候

間、一日も安心は不相成、第一は 御冊^(柵)少々にも御手広に相成候得者、

玉体之御為、千万金にハ難換御大事と

奉存上候、御築地外火除地、是以図面之通りニ相成候得者、御手厚之御儀、当地にてハ、既ニ 尊館、尾・紀兩館

ニも、周囲に火除地御座候而、近来紀公御本館御焼失、青山近ク之御住居ニ相起居候ニ付、達摩門前ニ御座候組屋敷
 抔取拂、火除地も出来候御儀ニ候得者、何分此儀も御整相成候様、奉渴望候、左候は、丁度陽明家より被 仰出候通、

幕府と御崇敬被為在候、御忠誠之御儀も相貫き、叡感ハ勿論、一統難有奉感服候よりしてハ、弥増忠誠相竭候様、

人心固結可在ハ顯然之御儀ニ付、何率此度之御事ニ、 文恭廟難有思召被為從、被 仰出候ハ、乍憚至忠且至孝ニ

も可被為成候事、委曲薩摩守よりも可申上と奉存候、不贅候得共、何分千古無比御忠誠之 聖公、御鼎力に而御整相成

候様奉希上度候、全躰此儀ハ 関白公より被 仰出候儀至当と奉存候処、追々伝承仕候ニハ、関東之御都合宜様と、

もしや前後御願望被為在候而、御差控御沙汰たり共ハ不相成哉、又ハ御心付無御座哉、兩端ニ奉恐察候、右ハ不外御

間柄にて候所、ケ様申上候ハ恐入候得共、 聖上之御儀ニ候得者、不拘忌諱申上候段、御仁恕奉願上候、將又関白公

より可被 仰出筋之御儀を、 陽明右府公より御内沙汰有之候事、万々一 関白公御耳ニ入候得ハ、甚以御迷惑御

不都合之趣ニ而、御嫌疑中被 仰出候段ハ御座被為在度事と、重々薩摩守も申居候義、全以至忠誠無止の御念願より

相発候御儀と、尚更奉感服候、定而尾公へも被 仰進候御目筋故、御密々被 仰進候半、何分憚多くハ候得とも、先日

の御末旁以尾公御鼎力ニ而ハ参兼候半歟と奉存候間、何率御粉骨之程、幾重にも兩人より奉願上候、乍憚 玉体御保

養、且火難除地ハ非常之御手当、其上文恭廟御至忠之御遺志被為継候処、眼目ニ相成候得者、至理穩当之御筋合と奉存

候、尤 有栖川様御転移ハ甚御六ヶ敷可有御座候得共、幕議さへ御決着候得者、 聖公より云々の御理論被 仰進

候ハ、御感快可被為在と奉存候、右ハ草莽之微臣輩申上候筋にも有御座間敷候得とも、当今人心不寧之時合ニ候へ

ハ、幕府之御誠忠徹有談ニ候得ハ、下々敬伏感戴よりハ、猶更忠勤を可尽、感動御鼓舞無此上、萬々歳御武徳御繁栄

之御基と存候間、此段密奉仕候、尚又御聖考奉伺度候、恐惶、頓首千拝

① 「藍山公記」の安政元年七月三日条に、「鹿兒島侯・水戸老侯へ御書簡ヲ進ラル、水戸老侯へ御呈書ノ分、左ノ通り」として引かれている。

② 近衛殿Ⅱ右大臣近衛忠熙（在任、弘化四・六・十五—安政四・正・四）。夫人興子は島津斉興女（斉彬妹）、又その子忠房夫人光子は島津一門久永子で斉彬養女。島津斉彬との姻戚関係から、斉彬（薩摩守）の一橋慶喜將軍継嗣推挙に協力して、朝廷内で積極的に動いている。さらに、間もなく七月十六日、忠熙女信姫が、斉彬嫡子茂久（久光長男、のち忠義）と婚約する。

③ 禁闕造営Ⅱ安政元年四月六日、京都御所後院北殿より出火、内裏も炎上。その復興問題。四月十六日、幕府は老中阿部正弘を作事総奉行に任命、勘定奉行石河政平以下、勘定方役人に上京を命じている。朝廷側では、まず四月二十一日、議奏橋本実久ら以下を内裏造営用掛等に任命している。その後の禁裏造営、防火空地等の設置等について、徳川斉昭や島津斉彬らは、阿部老中に、盛んに提言を行っている。『水戸藩史料 卷七』（上巻、乾、三六四頁以下）によると、斉昭の意見書は次の通りである。

。四月二十八日、阿部正弘宛意見書——仙洞御所と内裏を分離し、相互に延焼を防ぐこと。両御所とも、四方へ広く空地をとり、林等により地上の火災を遠ざけること。

。朝廷内でも、その頃、防火地設置の議が起っている。

。しかし幕府では、旧規を守り、費用の点からも、その実現を考えず、朝廷でも従来通りの再建が内命された。

。七月十六日、斉昭、重ねて阿部正弘宛建言——「永世の御為、せめて火除地ぐらゐは存分に取払い申したきこと」。

。七月二十五日、斉昭登營して、勘定奉行石河政平に、再び防火地の設置を強く説いている。

④ 近衛公（忠熙）御建白Ⅱ禁裏再建については、朝廷内では、忠熙が防火空地の設置を強く要求していた。近衛の意見は、斉彬を通して宗城へ、そしてさらに斉昭へ伝えられていたことが、この書翰からわかる。なお忠熙は、この後、九月二十六日、輪王寺宮慈性法親王（有栖川宮家の出で、斉昭夫人吉子Ⅱ有栖川宮織仁親王女、の甥）にその趣旨を伝え、有栖川宮家経由でそのことが斉昭から幕府に伝えられるよう求めている（『水戸藩史料』同前、三六八頁以下）。

⑤ 陽明右府家Ⅱ近衛家、大内裏東側の近衛府のところにあった陽明門から。

⑥ 文恭廟Ⅱ文恭院、第十一代將軍徳川家斉、天保十二（一八四一）年閏正月三十日没。墓所は上野東叡山寛永寺

⑦ 関白公＝関白鷹司政通（在職、文政六年左大臣当時から、弘化三年太政大臣を経て、安政三年八月八日まで）
内容 一、昨日、島津斉彬邸で、近衛忠熙より島津斉彬への「報告」書（御所造営の件につき）意見を交換

一、近衛公の建白（防火空地設置）は全くもっとも千万なり

一、「火除地」は是非とも設けるべきで、江戸でも、水戸・尾張・紀州邸には設けられてある。その為に斉昭の努力を求む。

一、この件は、鷹司関白よりも言い出されていたのに、関東幕府の都合よきように変えられたものか。

一、幕議を動かすのは、斉昭が最適なり。

——なお、斉昭は、天保五（一八三四）年九月十三日以降、天皇陵の修復建議を、幕府に再三にわたり行っている。とくに神武帝の畝傍陵の荒廢と、その所在さえ不明確なことに強い関心を示している。その後天保十一（一八四〇）年十一月、先帝の崩御を機に、関白鷹司政通にあらためて、山陵修復と、先帝に諡号を捧げること建言している。島津斉彬は、このとき以来の、皇室・鷹司関白と斉昭の關係、そして斉昭の「皇室崇敬」をふまえて述べているのであろう。

一一五、安政元年九月一日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

「藍山公記 卷六十」安政元年九月朔日条所収

前月念七、不存寄尊翰被投、難有奉盟誦候、如 貴諭、秋涼相加候御座候処、先々 閣下被為揃、倍御清勝、為闔国恭賀無量奉南山候、聖公依旧被為連御神略御儀、朝野難有奉寄頼候、拟御国産之鮭味噌漬御恵投被成下、重畳奉感荷、別段之好風味と奉存候、将亦、此間ハ川越亭へ参会仕候ハ、郎兄にも彼是懇切之儀、感激不啻事共ニ御坐候き、今日ハ御礼も首尾能被申上、可賀之至、さぞ 聖公にも、可被遊御安悦と奉恐察候、従是ハ別而親交切差可仕、多々得益可仕と相樂居申候、何等心付候義ハ申述候様、渴望之御楮表、誠以恐縮汗顔奉存候、乍然愚僕之義候得ハ、心付候事ハ可申述と奉存候、且、酒ハ被遊御禁候故、一切被相用間敷と御被思召候得共、若被用候様聞込候ハ、指留候

様奉謹承候、英明之御様子候得ハ、川越之百弊追々一先、諸政振起可相成、海防一条杯ハ、尚更御行届之至候半、先以 皇国御為、川越之為、無此上事ニ奉存候、陳者当冬内にハ、英奴近海へ渡来可仕風評伝聞仕候所、頗猖猾之夷候得ハ、一層御案思申上候、聖公御英断可被為在と奉存候得共、幕御采用如何と奉痛悶候、只今と相成候而ハ、墨奴同様位迄にハ御取扱無御坐候而ハ、落意不仕ハ勿論に候得とも、墨より一二段御扱宜敷不相成様、只以其処計奉痛憤候、何卒狼夷之猛勢に畏縮勢(7)の様、御処置有之儀、萬々奉仰望候、愚意ハ不拘用捨、近日辰閣へ申述候半と奉存候、今之内 廟議確乎不動、如獄、御英断有御坐度奉願候、先ハ御請奉申上度、如此御坐候、尚委曲又可奉申上候、恐惶頓首、謹言

暮秋朔 当賀

再敬白、隨時為天下御保練被為在度、奉謹祈候、何等御清暇も御坐候ハ、其内何卒又々参 殿、御密話奉申上度、願上置候、将、薩倅之儀ニ付云々、敬承仕候、如 尊命、此後養子も可仕、何分六ヶ敷事出来不申、御同情心痛仕居候、未タ薩摩も快服不仕、尤最早氣遣候程にハ無御坐、不日清快可仕候、久々面話も不仕候故、倅不幸後の考も承不申候、尚様子も追々可申上と奉存候、此書面、越前守より差越候故、呈一覽仕候、非常之大烏有、越前当惑心痛ハ、申上候迄も無御坐候、精勵賢兄候得ハ、別而氣の毒之至御坐候、乍然、大火ニ付而も、撫育杯能居候様子、感羨仕候、尤此書面ハ、追而被遊御下候様、奉願上候、不備

天下倚頼聖明老公閣下

宗 城

- ① 八月二十七日齊昭書翰Ⅱ「藍山公記 卷五十九」安政元年八月二十九日条に記事あるも、書翰の所見なし。
② 川越亭Ⅱ川越は、齊昭第八子八郎麿（昭融）の養子入り先、川越藩主松平典則家。八月二十五日、宗城は、松平八郎麿邸に赴いている（「藍山公記 卷五十九」安政元年八月二十五日条）。

③ 英奴Ⅱイギリス東印度艦隊司令長官スターリング James Stirling、安政元年閏七月十五日、軍艦ウィンチェスター号 Winchester にて長崎に来航、各地港湾への入港許可を求める。同月二十七日、幕府は、その件で、斉昭に意見を求める。同二十九日、幕府はイギリス軍艦の長崎・箱館・下田三港入港の許可を与える。その後、長崎に於て、長崎奉行とスターリングの間で、條約締結の交渉が行われる。八月二十三日、「日英和親条約」調印。八月二十九日、イギリス使節スターリング、長崎を去る。幕府は、九月十三日に調印を布告。

④ 辰閣Ⅱ京都所司代脇坂安宅（播磨竜野藩主）、辰Ⅱ竜、前号「一〇五（二）」注②参照

⑤ 薩粹Ⅱ島津斉彬の嗣子の件。嘉永二年暮からの「お由羅騒動」の後、ようやく斉興の時代が終り、嘉永四年二月二日、五十一歳で襲封した斉彬の継嗣は、嗣子虎寿丸の死去に伴い、斉興と由良の間の子、斉彬異母弟久光の子茂久（のちの忠義）を養子とする動き。薩摩の騒動の余波。

⑥ 大火Ⅱ安政元年六月十三日、福井城下大火、数千戸焼失。松平慶永は折から帰國中、福井にあり。

内容 一、国産の鮭味噌漬惠贈への礼

一、先日（八月二十五日）川越亭へ参会の際の礼

一、八郎麿の川越松平家養子入りを悦ぶ。川越藩にとっても好都合で、今後同藩の海防の役目も充実せん。

一、イギリス軍艦の近海への渡来を案ず。墨奴（アメリカ）と同程度の開港場は許さざるを得ず（註①のように、八月二十三日、長崎で調印済み）。イギリスの動きは大いに警戒すべし。

一、島津斉彬継嗣は、養子をとるべきなり。斉彬の健康と、同家の様子を案ず。

一、越前（松平慶永）よりの書状を呈覧に供す。福井大火は気の毒なるも、大いに精励中の様子なり。

一一六、安政元年十月七日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し同前

「藍山公記 卷六十一」安政元年十月七日条所収

密翰雪手謹呈仕候、霜威追日相加候御坐候処、先以

閣下倍御勝常被為揃、恭悦無量奉南山候、依旧御朝励夜白、

皇國御為被竭御神略候御儀、誠以朝野奉感頼候、其内近日浪華へ魯夷舶渡來候處、乍憚御予備も無御坐、且輕蔑自儘之所業、絶言語候次第、殊帝都隣近之場所候得共、天機之程如何可被為入と、乍憚草莽之微臣等、寢食不安奉痛憂候、折柄 聖公盱宵御心勞、御運策可被為在、深々御胸裡之程奉恐察候、如何之妙謀有之哉、閣老始ハ泰然たる様子、愚劣浅思にハ、帝都近き儀ニ付、閣老参政衆之内、発都可相成と奉存候而、越前守へハ其段申遣候處、一小監察大久保輩計とハ輕易之至、不可解、專人氣動靜願望故ニも候哉、追々伝承仕候而ハ、京撰之騷動、実以難尽筆端、就中和歌山表甚敷と申事、氣の毒奉存候、巷説ニ而ハ、魯夷大坂へ開港之歎息にて、閣老へ書翰差出度旨申出候處、下田港へ航海可仕旨、御沙汰御座候由、不日來着可仕、其末筒肥・川左両氏始出立との事、如何応接可相成哉、去十二月廿八日歟、筒・川両氏へ魯夷より贈候と申冊子中大坂港之儀も書載御坐候處、否之返答無之内、押付乘込候段、絶言語、不屈之至と奉憤歎、切齒候、尤渠ハ去ル年亜夷内地迄乘入候處口夷ニ仕、云々可申出哉に候得共、亜奴ハ突然、不意之儀、魯奴御応接懸合半途、且表向計にハ候得共、和親云々申立候主意とハ表裏之至、此度社、落胆仕候様、敵數応接、拒遏有御坐度、例之通迫切唐突之私候得ハ、踰分之罪言とハ奉存候得共、難黙止、過日辰閣迄ハ建白仕置候、素浅劣心得違に可有御坐哉に候得共、大坂迄も馬頭為開候段ハ、張目扼腕、残念難止奉存候

○英奴、墨夷共申立候趣にてハ、トルコ云々ニ付而ハ、皇國近海をも環航仕、見懸次第魯奴追撃可仕由、実に候ハ、當節魯奴大坂渡來杯も客易にハ出来申間敷處、何分難解、矢張猖獗之啖・魯、互に通謀、結構仕候處にも可有御坐哉、事情不弁之拙劣杯、甚不審奉存候、何分御洞察之奉伺 賢慮度候

○菊池為三郎儀、去月廿五日云々被 仰付候由、当人へハ造酒蔵より 本月三日為申聞候由にて、四日朝吹聴罷越申候、当人、未步行杯得不仕候間、舍弟ヲ以申聞候 当人徹肺腑難有奉感銘候段ハ、申上候迄も無御坐、於私為三郎数年間千辛萬苦仕候、至忠之貫達仕、帰參被仰付候段、無此上難有感謝仕申候、且先々無難ニ御渡シ申上候段、不啻安心仕申候、此他忠烈之

面々も同様御沙汰御坐候旨、大賀之至、御德輝無量、耀溢仕候御儀、萬々奉恐悅候、右ニ付而も 聖公多少御心痛可被遊と奉恐察候

○川越ニ而も、毎度懇切之儀、弥増英偉之程、感羨敬服仕候、尚追々教示可相成奉存候、今日頃ハ参 殿可有之旨、噂も御坐候間、伝言申上被具候様相頼置候間、被遊御承知と奉存候、何分奉伺度、心緒萬縷に御坐候間、御清暇に御目通ヲ希上度候、十郎麿にも、不遠御目見願候も可相成、右ニ付而ハ、仮拙劣に而も、心付候儀可申述旨、御懇篤之御沙汰被為在、恐入奉畏居候、其内少同席内都合も御坐候間、表向ハ格別之頼ハ、僕除去仕御坐候、右ニ付、萬一疎意相心得候様にとも被 思召候而ハ、甚背本意、恐縮奉存候、次而頼之有無に係候儀にハ無御坐候、心付候事ハ可申述との御一言、心頭に御坐候而、遺失不仕候故、左様御聞置被成下度奉希候、先ハ前述之儀共密奏仕度、乍恒乱略之段、幾重にも御仮恕奉仰望候、恐惶謹言、千拝

初冬七日午時

伊達遠江守

宇宙感頼水府聖老公閣下

再啓、秋寒追日増加之候、為 天下尊体被遊御保練度奉謹念候、此品乍不珍、近日弊邑より廻着仕候間、進献仕候、御叱留被下置候ハ、難有奉存候、薩摩守儀も追々快服仕候、明後日ハ私儀も罷越、面会も可仕と相含罷在候、尤未タ病床ニ罷在、来月中出勤仕候様可相成と奉存候、最早被遊御安心度奉希上候、恐々頓首

① 浪華魯夷船渡来Ⅱロシア使節プチャーチン、嘉永六（一八五三）年十二月五日長崎再来以後の動き。

。嘉永六年十二月十四日より、日露交渉。

日本側は応接係筒井政憲、川路聖謨、荒尾成允、古賀謹一郎。樺太国境画定問題が起る。

。安政元年（嘉永七・十一・二十七改元）正月八日、プチャーチン一たん長崎を去る。

。同年三月二十三日、プチャーチン、軍艦三艘を率い、又々長崎に来航。

② 同年三月二十八日、プチャーチン、樺太国境画定と和親条約締結促進を申入れて、長崎を去る。
同年八月三十日、プチャーチン、軍艦ディアナ号で箱館に来る。九月八日大坂行を告げて去る。
同年九月十八日、プチャーチン、大坂湾に入り、天保山沖に碇泊。
同年十月三日、プチャーチン、大坂湾から紀伊国加太浦に移り、五日同浦を去る。
同年十月十五日、プチャーチン、下田に来航。江戸湾行を要求。そのまゝ十一月一日より、下田で日露交渉始まる。
同年十一月四日、東海道大地震の津波で、下田港のディアナ号が座礁大破。
同年十二月二十一日、日露和親条約調印。

③ 大久保Ⅱ目付大久保右近将監忠寛、九月二十三日、幕府より上京を命ぜられる。しかしプチャーチンの大坂退去により結局上京せず。

④ 京摂之騒動、和歌山表甚敷Ⅱプチャーチンが十月三日、和歌山北方の加太浦に廻ったため、騒ぎは、京大坂から彼地へ移る。

⑤ 筒肥・川左Ⅱ幕府は、前年嘉永六年十月八日、プチャーチン第一回来航中に、露使応接掛として、西丸留守居筒井肥前守政憲、勘定奉行川路左衛門尉聖謨、目付荒尾土佐守成允、儒者古賀謹一郎増を任命しているが、九月二十九日、同人らに、臨機に下田へ赴くよう命じた。

⑥ 去十二月廿八日云々Ⅱ嘉永六年十二月の長崎での交渉で、プチャーチンは、国境画定と開港通商を要求提案した。交渉は、十二月十七、十八、二十、二十二、二十四、二十六、二十八、三十日と、ひんばんに行われている。

⑦ トルコ云々Ⅱイギリス使節スターリングは、閏七月十五日に長崎に来航したとき（「一一五」註③）、ロシアと交戦中のため、洋上でロシア艦の動きを探知する必要から、その便宜を得たいとしている。ロシアとトルコの戦争に、英・仏がトルコを助けたクリミア戦争（一八五三—五六）である。

⑧ 菊池為三郎Ⅱ第十二号「二五」註①、第十三号「三五」註⑤など参照。その他各所に散見。水戸藩士、三左衛門重善と名のる。斉昭が、弘化元年の致仕後、藩内の対立から、伊達宗城に託して宇和島に身柄を預けた者。福井藩士多田順之助と変名して宇和島入りしたとの記録もあるが、弘化四年八月、遠州浜松住人多田慎之助が、宇和島藩剣術師範多都味嘉門に伴われて宇和島入りし、明倫館で稽古をはじめた、という記録もある（兵頭賢一『愛媛県先哲偉人叢書 伊達宗城』一一〇頁以下）。

⑧ 造酒蔵Ⅱ「藍山公記 卷六十一」安政元年十月七日条に、「菊池造酒蔵弟為三郎事……」とあり、為三郎の兄

⑨ 十郎麿Ⅱ齊昭十男、昭音、石見浜田藩主松平家へ養子、右近將監武聡と名のる。のち十一月一日、宗城は登城して、松平十郎麿の將軍初謁見をとりもっている。（「藍山公記 卷六十二」）

内容

一、九月十八日のロシア艦の浪華（大坂湾）入りは、予期せざることにして、全くの痛愛事なり。

一、閣老以下は泰然たる様子にて、全く愚劣なり、帝都近きため、閣老の誰か直ちに京都へ向うべし。

——幕府では、禁裏附長谷川清福が、「ロシア艦の様子は平穩である」と朝廷に報告。京都所司代脇坂安宅は、大和郡山・丹波亀山両藩に、京都周辺の街道の警備をさせる。——

一、目付大久保忠寛の如き輕輩に上京を命ずるのは、不可解なり

一、大坂へは、去年十二月の交渉のときの開港要求に「否」の返答をせざりし為に、入港せしもので、「憤歎切齒」なり。

一、亜夷（アメリカ）・魯奴（ロシア）とも、和親とは表裏異なるやり方であり、応接は厳しくすべし。

一、辰閣（脇坂所司代）へは建白書を出してあるが、大坂開港は絶対反対。

一、水戸藩士菊池為三郎（重善）、長年の宇和島滞在を終えて帰国。

一、川越（松平八郎麿、昭融）の態度は敬服の至りなり。なお再会したし。

一、十郎麿（昭音、浜田藩主松平右近將監武聡）にも何れ御目通りの機を得ん。

一、領国より廻着の品を呈上。

一、薩摩守（島津斉彬）の病状回復、来月中は出勤か。

（参考史料）一一七、水戸藩士菊池為三郎の宇和島離藩、帰国

菊池為三郎の宇和島離藩、帰国のことについては、「藍山公記 卷六十一」以下に、いくつかの記録が引かれているので、参考までに示してみよう。（ ）内は河内の註記

(1) 「藍山公記 卷六十一」安政元年十月七日条、桑折家（宇和島藩家老）文書より

菊池造酒蔵弟為三郎事、永々致他国、難渋之趣相聞、早速引戻候様、尚又、致帰府候ハ、其趣可申出候

老公（徳川斉昭）御書下大意

菊池為三郎等（庄兵衛という供を連れていた）、兼而致出府、以後不致帰国旨、奸徒共出奔之軀ニ取扱、尋方申聞候由之所、右ハ全出奔と申筋にハ無之、国之為存候故之儀と存候、且其以來、伊達遠江守殿かくまれ居候哉に相聞候間、早々引戻、获信之助（水戸藩士）抔同様にハ可召出候、無左而ハ中納言（徳川慶篤）始、於此方も、伊達家ヘ対シ難相済存候、云々

(2) 「同」十月八日条、桑折家文書より、伊達宗城（在江戸）より桑折左衛門宛書状

（前略）將又、多田慎之助（菊池の変名）儀、去月二十五日帰参之命、左之通有之、其身ハ兄造酒蔵より、当月三日に伝達致候由、四日に申出候、多年千辛万苦赤忠之程、暢達可賀之至、於当家無難に相渡申候、大慶無限ニ存候、此他忠士他所潜居之者、同様帰参之沙汰有之由、乍然、為三郎程粉骨心勞せるもの、身分も渠位之者ハ、余に無之由承申候、尤為三郎儀も、老公御出府之趣にてハ、全亡名にも不相成、重畳之仁慮と存候、乍然是迄に相成も、老公ハ勿論、戸田（忠敏）藤田（誠之進、東湖）抔、多少心痛之由、再度兩人より承申候、誠以進忠退奸之清時ニ相成、乍傍躍然快喜無量存候、此儀内蔵（宇和島藩家老松根図書）、清助（宇和島藩士三輪清助、吉見長左衛門親族）へも被申伝、彼之庄兵衛へも、清助より申聞候様有之度存候、同人身分之處ハ、追々尚承候上可申遣候、不備

初冬八日認、又云（後略）（前出『伊達宗城』一一五頁所引）

(3) 「同」安政元年十月二十八日条、江戸へ戻った菊池為三郎を、宗城が謁見

水戸侯御家臣菊池為三郎出デ、御逢遊バサル、同人ハ、九年以前ヨリ、水戸老公ノ御依頼ニ依リテ、御当表ヘ預リ保護セラレ居リタル者ニテ、此度同家ヘ召還セラレタルニ付、謝礼ノ為メ参邸シタルナリ、右ニ付、同人ノ無事帰参ヲ祝サレ、御吸物御盃ヲ遣ハサレ、種々御談話等アリ、酉ノ中刻（午後六時）退出ス、同人ハ世子殿（伊達宗

徳)ニモ拝謁シ、御礼ヲ言上セリ

(4) 「藍山久記 卷六十二」安政元年十一月二十三日条、宗城より松平慶永宛書状

(前略)菊池為三郎も、去月廿五日、改而参候故、病後霜威之時合、自玉仕候様御伝言御座候趣、内々申聞候得者、英明主之奉蒙御致声、冥加至極、奉感佩候由申出候、随而同月晦帰郷仕申候、(下略)

(5) 「藍山公記 卷六十四」安政二年正月十八日条

(水戸)家臣菊池為三郎、近日広尾御邸(芝白金、宇和島藩邸)へ年頭御礼ニ罷出候筈ニ付、其節ハ先公(宗紀)ニ拝謁仰セ附ラルル旨仰出サル

(6) 「同」安政二年正月二十日条、宗城、菊池為三郎らと懇談、宗城は二月五日、再び菊池と会い、江戸を發ち帰国水戸候御家臣获信之助・菊池為三郎参邸、直チニ御目見仰せ附ラレ、種々御懇談アリテ、御盃ヲ遣ハサレ、戌中刻(午後八時)退出ス

(7) 「藍山公記 卷六十六」安政二年三月二十八日条「江戸記録」より、菊池為三郎へ手当金下賜の件で伺い

水戸藩士菊池為三郎事、当地ニ滞在中之処、今度水府江罷帰候様御沙汰有之、来月二日頃当地引払之都合(当地は江戸、菊池は安政元年十月初めに宇和島を發ち、二十八日には江戸で宗城に会っている)ニ相成候処、此度ハ家内モ召連、別而雜費路用モ相嵩、何分手当無之為、極々当惑致候得共、最早御家之御手ヲ離候故、金子拝借等之儀相願候事モ難相成筋ト相考、彼方(宇和島)ニ而色々調達致候得共、難相調ニ付、何卒左膳(吉見)・清助(三輪)兩人ヨリ取替呉候儀ハ出来間敷哉ト申出候故、兩人相談之上、朔日(四月)暇乞ニ罷越候節返答可致旨申述、差置候、然ル処、是迄取替遣候金子モ有之、又々今度兩人ヨリ取替候而モ、所詮返済之期ハ有之間敷、甚難渋ニ付、昨年為三郎帰参ニ而御手ヲ離候砌、最早御手切之事故、拾両計可被下置トノ御吟味ニ候処、其節者、用意金モ本人手元ニ而調達致候

故、一切拝借等ニ不及旨申出、被下金之事モ夫切ニ相成候間、何卒右代リト被思召、今度限、御手切ニ五兩位被下置候儀者相成間敷哉之旨、吉見左膳ヨリ願出、尚御目付ヨリモ同様申出候処、最早御家之手ヲ離レ候者之儀ニ付、此際 上ヨリ御助力被成候而者、又々此後迎モ難渋之節願出候得者、引合ニモ相成、際限モ無ク御役价ニモ可相成ニ付、斯様之事ハ不出来事ニ成置方可然、乍併、左膳・清助兩人心配モ可有之事ニ付、今度限、御目付御用金ヲ以テ、右兩人へ五兩被相下、不得止兩人手元ヨリ取替候様可申聞旨、左膳へ被申聞

一一八、安政元年十月十八日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

「藍山公記 卷六十一」安政元年十月十八日条所収

密翰拝呈仕候、霜威追日相加候御坐候処、先以 閣下被為揃、倍御勝常被為涉、恭悅無量奉大賀候、扱魯奴舶一昨望日下田港へ廻航仕候由、右ニ付、筒井始、明日發程仕と申事、如何応接可相成哉、依旧姑息之論談可相成と、痛悶之至、竊ニ切齒之外無御坐候、將又近日密々伝承にてハ、勘定局ハ川路始、唐太嶼丸々魯へ可相渡、監察局ハ不可渡、兩局議論墨白よりして不平和相起候由、長大歎之至奉存候、尤兩局不平も可憂ハ勿論と奉存候得共、売国論主張、福閣始同意相成、此度下田港応接ニ相成、取極りとも仕候時ハ、後日如何存候とも御返し不相成、一大事之期際と奉存候、尤 聖公達尊聴候末云々、取計候儀に候ハ、御英断被 仰示、監局論之通可相成候得共、当春墨奴如条約、何事も不申上、懸合濟之上云々相成候様申上候時ハ、聖慮被為在候とも、御処置も六ヶ敷、御鼎力ニ而、勘局之奸議御抑遏被為在度、素より僕不申上とも、御運策は可被遊御坐と奉恐察候得共、何分難默止時機と奉存候間、唐突右之段奉密奏仕候、恐惶、誠懼謹言

十月十八日

再敬白、隨時為天下被遊御保練度、奉謹祈候、恐々頓首、百拜

宗 城 拜

宇宙仰頼水府聖明老公閣下

急密奏

- ① 魯船下田へ「プチャーチン、大坂・紀伊加太浦を経て安政元年十月十五日、下田に入港。
- ② 筒井始「應接掛筒井・川路ら、十月十六日に下田行を命ぜらる。
- ③ 福岡「老中阿部弘（備後福山藩主）

内容 一、ロシア使節プチャーチンの下田入港で、應接掛いよ／＼出發

一、姑息な交渉は切齒の外なし

一、川路ら勘定局（勘定奉行）は樺太全島をロシア領とする案、監察局（目付）はそれに反対。当方の分裂は長大歎の至りなり。

一、阿部老中も「売国論」を認めており、それで調印されれば、取返しがつかず。

一、斉昭は是非、反対論（目付の考え）を主張すべし。

一、当春（三月三日）の墨奴（アメリカ）の際も、内密に調印致したり。今回は何とも黙止し難し。

一一九、安政元年十二月十四日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛過

* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

「藍山公記 卷六十三」安政元年十二月十四日条所収

過十日夕、不存寄 御書被下置、難有忙手奉盟誦候、如 尊諭、嚴寒之候御坐候処、先以 閣下被遊御揃、倍御機嫌能被為入、乍憚重畳至悦之御儀、奉萬祥候、毎度御懇章被成下、奉感荷候、拟先頃御沙汰被成下候御書物之儀、

拝借不相願候ハ、華岡^①へ被相廻候 思召故、申上候様、態々蒙 貴論、難有仕合、乍憚御懇篤之御儀、御札筆紙ニ難尽申上、深々難有奉存候、右様之御都合ニ被為在候ハ、早速何等と可奉申上処、閑等ニ相心得、多罪恐惶之至奉存候、扱右之書物ハ、両部共所持ハ仕居候得共、早率ニ書写申付候間、誤字夥敷御坐候而、甚当惑仕候ニ付、当秋、官庫之御書物拝借相願候所、不相下、甚残念至極ニ付、何とか再願可仕含罷在候処、御恩借可被成下旨重々願敷、以御庇蔭、一応校合仕候ハ、宿願相届、無此上難有仕合奉存候、何卒御都合次第拝借被仰付度、伏而奉希候、書目左之通

海上砲術全書^②
ゼーアル之
訳 書

遠西火攻撰要^③
エルンスト之
訳 書

此段早速御請可奉申上筈御坐候処、両三日無余義私事ニ而紛雜仕、今日迄遅延仕候段、重々 思召之、恐入奉存候、先ハ此由奉申上度、乍恒乱毫、略紙相用、奉恐入候、頓首謹言

臘月拾四日

敬白、御端書難有仕合奉恐入候、乍憚 尊躰社御保護、為天下御專要被為在度奉存候、恐惶、百拜

藤原宗城

明公閣下

呈侍史

奉報

① 華岡ハ華国カ、華園カ。興正寺住職華岡撰信カ

② 海術砲術全書、ゼーアルハZee-Artillerie、第十六号「七七」註①、第十五号「六一」註②、カルテン Calten, J. A.: Leidraad bij het Onderriicht in de Zee-Artillerie

③ 遠西火攻撰要、エルンス=Ernst-Vuurwerken' 第十六号「七七」註①、第十一号「一二(1)」「二三(2)」参照、セスレル Sessler, J. W.: Handboek ter vervading van Ernst-Vuurwerken

この二書は、嘉永三年正月二十六日の宗城書翰（「七七」）で、借用校合済みの謝辞が述べられている。

内容 一、十二月十日の斉昭書状（所見なし）への返書

一、書物についての教示、配慮を謝す。

一、「海上砲術」と「遠西火攻」の二書は先般（嘉永三年）早急に筆写せしため、誤字等多し。

一、当秋官庫の書を借用願いしも不許可。

一、右二書を、校合のため何とか借用致したし。

（一九八四・十・十一、次号へ続く）